メタルクウラ帝国建設記

俺がベジータだー！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メタルクウラ帝国建設記

【Ｎコード】
Ｎ６５３３Ｚ

【作者名】
俺がベジータだー！！

【あらすじ】
この小説は俺がメタルクウラ・コアだ！なんかもんくあっか？の続編です。主人公はかなり外道なのでそういうのが苦手な方は戻るを押してください。

第一話（前書き）

僕は戦闘民族サイヤ人　リリカルなのは編が行き詰って発表を中止にしたので変わりにこの小説を書きました。即席で書いたので途中で止めるかもしれませんが出来るだけがんばります。

第一話

前回のあらすじ。

なぜかメタルクウラ・コアになってしまった俺は最初わけがわからん状況に混乱したが次第に落ち着いてまいっかと第二の人生を楽しもうと思い、そして折角メタルクウラになったのならメタルクウラ帝国を築き上げようと決意した。

とりあえずそこら辺にある星を無差別に侵略して資源を奪いメタルクウラを量産。そしてついに５００万体にもなる大兵力を手に入れたよ。

この兵力を率いて俺は地球に居るＺ戦士達に奇襲攻撃をして難なく綺麗な花火にしたよ。

意気揚々とゲデスターに帰還したが突如目の前に巨大な次元層が現れ巻き込まれてしまうよ。

そして気がついたら何か時空管理局とか名乗る奴等が死亡フラグを言い放ったよ。

絶望的な戦力差の前に時空管理局は生き残れるのか！？

時空管理局の奮闘が今始まる！！

「何だったんださっきのは？」

あの後時空管理局と名乗る宇宙船がゲデスターに乗り込もうとしたがメタルクウラの気功波で難なく撃墜した。

しかしなんだ時空管理局って？ロストロギアって？

まあ一つ分かった事がある。ここはドラゴンボールの世界では無いという事だ。どうやら次元層のお蔭で別の世界に飛ばされてしまったみたいだ。

まあ別に大丈夫だろう。こっちにはメタルクウラが５００万体も居るんだし、それにメタルクウラを生産する設備も整っているから適当な星を侵略してさらに量産できる。

時空管理局がどんな組織か分からんがまた襲ってくるなら返り討ちにしてやる。

とは言ってもやはり情報が無いと少し心細い。偵察用ロボットを派遣してこの辺りを捜索させよう。

全く、面白くなってきたぜ。

次元管理局・次元航行艦隊・第２３次元方面部隊は混乱状態になっていた。

突如現れた次元層反応の後に数え切れない程のロストロギア反応が現れ、近くを巡回していたＸＶ級次元航行艦『トワイニング』に現状を調べさせるため向かわせたが、そこにあったのは巨大な宇宙船。

ディスプレイに映し出されたその光景にトワイニングも司令部も唖然とした。

いち早く立ち直ったトワイニングは勇敢にも武装の解除とロストロギアの引渡しを言い渡したが、その巨大な宇宙船からは何も返事が無かった。

誰も居ないのかと思ったトワイニングはその巨大な宇宙船に乗り込もうとしたが、突如その巨大な宇宙船から1体のロボットが出てきた。しかもそのロボットからロストロギア反応が出ていた。

トワイライトはそのロボットを捕らえようとさらに近づいたが、そのロボットが右手を差し出した瞬間、映像が途絶えトワイライトの反応も消えた。

そこからは蜂の巣を突っついた様な騒ぎだった。

何せＸＶ級次元航行艦があのロストロギア反応を発するロボットに一瞬でやられてしまったのだ。しかもそのロストロギア反応と同じ反応が無数にあるのだ。

この次元世界は海賊が多いのでＸＶ級次元航行艦は１５隻。そしてＬ級次元航行艦は４５隻と他と比べると恵まれた戦力を持っているが、相手はさらに多くの戦力を持っている。これでは到底あのロボットには勝てない。

そこで第２３次元方面部隊は本局に応援を要請した。

―――時空管理局とメタルクウラ帝国との戦いが、始まろうとしている。

第二話

俺が次元層に巻き込まれた時から3日が過ぎた。

あれ以降、特に何も無く過ごしている。

とは言っても偵察用ロボットがここから３４０光年離れた惑星からあの宇宙船と同じ形の宇宙船が多数集まっているとの情報が送られてきた。どうやらここが時空管理局の本拠地らしい。それに再攻撃の準備もしているし、あと数日経ったらまた攻撃をしかけてくるだろう。

まああんなポンコツな宇宙船が何隻集まろうがメタルクウラの敵ではないがな。いや、戦闘用ロボットでも倒せるな。

しかし少し気になることがあるな。あの宇宙船には武装らしきものがなかったしだからといって輸送船ではないだろうし大体形が悪趣味すぎる。

後半は唯の罵倒になったがまあどうやって攻撃するのかわからないのだ。

と言ってもまあ大丈夫だろう。ドラゴンボールの世界以外でメタルクウラに傷をつける攻撃なんて滅多に無い。戦闘用ロボットの装甲でさえ怪しい。

だから本拠地に宇宙船がどれだけ集まろうが攻撃はしない。本当は絶好の機会なんだろうがそれじゃあ面白くない。

それに我がメタルクウラ帝国の記念すべき第一戦だからな。船を一隻残らず宇宙の塵にしてやる。

そしてこの一戦が終わったら敵の本拠地に乗り込み占領してやる。

ああ、後時空管理局の宇宙船を数隻拿捕しなければな。ツフル人の科学者達が調べたいと言っていたからな。

因みにこのツフル人達は適当な星を侵略していた時に見つけた。なんでも宇宙旅行に出かけていたから助かったらしい。因みに人数は１５０人位だ。

このツフル人達もサイヤ人をかなり憎んでおり、俺がサイヤ人を絶滅させようとしている事を知ると自ら俺の勢力に入った。

お蔭で今まで以上に科学力が上がった。

ツフル人達はサイヤ人を絶滅させたらまた自分達の星を作りたいと言い俺もまあ良いだろうとかなり質の良い星を用意していたがゲデスター諸共次元層に巻き込まれ現在に至る。

まあツフル人達はまた探せば良いと気にしてないらしい。

話が逸れたがこのツフル人達の科学者達が時空管理局の宇宙船に興味を持ったわけだ。

だから数隻拿捕する。メタルクウラの瞬間移動で艦内に進入できるから楽な仕事だ。

時空管理局さん、さっさと来い。

第２３管理世界『アトランタ』の軍港『カルタヘナ』では、本局からの増援部隊が集結していた。

本局では第２３次元方面部隊により送られてきた映像と証言により事態を重く見、大規模な次元航行艦隊を送り込んだ。

その数、ＸＶ級次元航行艦４６隻　Ｌ級次元航行艦１５６隻

旗艦『セントルイス』が率いる堂々たる大艦隊だった。

これ程までの大艦隊は管理局史上初めてであり、いかに今回のロストロギア事件を重く見たのかが分かる。

因みにＸＶ級次元航行艦の数が少ないのは、最近正式に採用された新鋭艦の為まだ十分に数が揃っておらず、数ではまだＬ級次元航行艦隊が主力だ。

所変わってここはＬ級次元航行艦『エスティア』

エスティアの艦長クライド・ハラオウンは深いため息を着いていた。

「艦長、ため息をつくと幸せが逃げますよ？」

そう言うのはエスティアの副官レオ・ライアン。

「そんなもんとっくに逃げてるよ。全く、もうすぐ産まれるってのに。」

「ああ、そういえばもうすぐ産まれるんでしたな。名前はもう決めたんですか？」

「ああ、リンディと話し合って決めたよ。クロノって名前にしようと思っている。」

「クロノですか、良い名前で。……そういえばこれから戦う時に子供が産まれると言った人は必ず死ぬという噂が。」

「止めてくれ。」

そう他愛も無い事を話す二人。暫くするとレオ・ライアンは真剣な顔をして話した。

「今回のロストロギア事件はかなり厄介そうだそうで。」

「ああ、俺も第２３次元方面部隊から送られてきた映像を見たが…ありゃ化け物だぞ。全長何百キロ、いやもしかすると何千キロかもしれんな。それ位デカイ宇宙船が写ってたんだ。流石の俺も度肝を抜いたぞ。」

「…それはまた、一体何所からきたんでしょうか？」

「さあ？何でも大規模な次元層が現れそこから出てきたらしいから一体何所から来たのやら…」

クライドがそう言い終えると、二人は同時にため息をついた。

———今回はかなり厄介な仕事になりそうだ。

二人はそう思わざるを得なかった。

第二話（後書き）

何か勢いで書いて勢いで発表しちゃったんですけど書置きが溜まってないと落ち着かないので暫く貯めます。次回は多分来年になると思います。

第三話（前書き）

遅くなりました、それでは投下いたします。

第三話

「――――以上が、今現在分かっているロストロギアの情報です。」

ここは第２３管理世界にある惑星『ビダリア』その首都である『ボルソン』にある時空管理局本部にある会議室。

ここでは、今回のロストロギア事件に対する対策を立てていた。

しかし会議室に居る管理局員の顔は暗い。

「……ここに来る前にあの映像を見たがあの巨大な宇宙船だけでも厄介なのにＸＶ級を撃墜したロストロギア反応を発するロボットが無数に居るだと…」

そう言って一人の管理局員がため息をつく。

それはそうだろう。今まで次元航行艦が落とされる事は多々あったがそれでもああも簡単に落とされる事は無かった。しかも落とされたのが最新鋭のＸＶ級なのだ。それだけでも管理局の衝撃は大きいだろうがさらにＸＶ級を落としたロボットが無数に居るのだ。こんな事管理局史上初めてのことであり、だからこそこれ程までの大艦隊を送ったのだ。

「全く。揃いも揃って暗い顔をしやがって、ここには臆病者しかおらんのか。」

そう言うのは旗艦『セントルイス』の艦長アドルフ・ディートハルト提督。彼は魔法至上主義者であり性格には難があるが、非常に猛将でありその勇敢さが買われ現在の地位に至る。

「しかしディートハルト提督。ああも数が多いと…」

「確かに数は多いがアルカンシェルで消滅させればいいだろう！何のためにこれだけの次元航行艦を集めたと思っているんだ！！」

ディートハルトは魔法こそが最強の武器だと信じ、その象徴たるアルカンシェルには絶対の自信を持っていた。事実、アルカンシェルはその威力をまざまざと見せ付けていた。

「…そういえば、あの宇宙船には人は乗っているのでしょうか？」

一人の管理局員が思い出した様な顔をして発言した。

「映像にもあった通り何も反応がありませんでしたから居ないんじゃ無いんですか？」

「しかしもしかすると居る可能性もありますし…」

「ふん！居たとしてもそいつ等は犯罪者だ！あのロボット諸共アルカンシェルで消滅させてしまえ！」

「いや、いくらなんでもそれは駄目ですよ。仮にも次元漂流者なんですから。」

「む、そういえばそうだったな。」

次元漂流者。次元震などの事故で他の世界に転移されてしまう人の事で過去に数件次元漂流者が現れている。管理局は次元漂流者は保護する方針でいるため流石にアルカンシェルは撃てない。

「ではもう一度通信を試みて駄目でしたらあのロストロギアをアルカンシェルで消滅させましょう。」

因みに管理局は今回のロストロギアは全部破壊する方針で居る。保管するにはあまりにも危険が大きい為である。

「では、これで会議を終わりたいと思います。出撃は明日の００６０時です。それまで各艦は待機していてください。」

そう言い終えると、各艦の艦長達は自分の次元航行艦に戻っていった。

「ふむ、ようやく時空管理局は準備を完了したか。」

全く、待ちくたびれたぞ。

因みに何で分かったのかと言うと、時空管理局の通信量が目に見えて増えたからだ。通信量が増えるという事は何らかを起こす兆候だ。今の現状で通信量が増えるという事は総攻撃しかありえない。

さて、我がメタルクウラ帝国の記念すべき第一戦になるから気を引き締めなければな。まあ負ける事は無いと思うが。

それにゲデスターの半径５００光年に静止レーダー衛星を何億個もばら撒いたし、これで時空管理局が何時出撃しても瞬時に分かる。因みにこの衛星は超小型で１ｃｍしかない。流石技術チートのツフル人。

因みに今回はメタルクウラは使わない方針でいる。あんなポンコツ宇宙船なんぞ戦闘用ロボットで事足りる。物量ではこっちが圧倒的に上だ。あのポンコツ宇宙船がどんな攻撃をしてくるのかは分からんが大丈夫だろう。

ピピッ！

むっ！レーダーに反応が！…ほう、どうやら時空管理局の宇宙船が出撃したらしいな。数は…２００隻以上か。ふん、たったそれだけで何が出来るのと言うのだ。これでは拍子抜けだ。

まあ取りあえずゲデスターの周りに戦闘用ロボット２００万体を展開させよう。少々過敏戦力な気がするが殺るなら徹底的に殺らなければな。

―――これが後のゲデスター宙域の戦いと呼ばれる宙戦である。

第四話

「やれやれ、マヌケな軍隊のおでましか。」

俺はゲデスターを包囲するように布陣している時空管理局の宇宙船を見ながらそう言う。

しかしどの宇宙船も小さいな。ドラゴンボールの世界で見た宇宙船の方がデカイぞ。科学力は対して進んでないようだな。

あ～スーパーノヴァで全部消し飛ばしてやりたいな。でも、ツフル人の科学者達に数隻拿捕して欲しいと頼まれてるし、いきなり消し飛ばす訳にもいかんしなあ。

全く、めんどくさい事この上ないぜ。

…ん？何だ時空管理局から通信が入ってるぞ？いまさら何を話そうってんだ。

まあいいか。奴等の最後の言葉位聞いてやるか。

そう思い俺は通信に応じた。

「全艦、配置に着きました。」

「うむ、そうか。」

ここは旗艦『セントルイス』の司令室。

セントルイスの艦長アドルフ・ディートハルト提督は目の前の宇宙船を睨み付けていた。

「図体だけはデカイな…だが今に見ておれ！アルカンシェルで粉々に消し飛ばしてやる！！」

「いや、まだ消し飛ばすとは決まっておりませんよ。」

冷静に答えるのはセントルイスの副官カルロ・バルデッリ。彼は少々勇敢すぎるディートハルト提督のストッパー役として周囲に知られており、またディートハルト提督の数少ない友人でもある。

「おっとそうだったな。全く、犯罪者なんぞに情けをかける必要なんぞ無いと思うんだがな。」

「まあいくら次元漂流者とは言えXV級を1隻撃沈していますからね。それなりの罪にはなるでしょうね。」

「ふん、犯罪者にはお似合いの身分だ！」

「…そういえば、宇宙船の周りに展開しているロボットは映像のと

違いますね。ロストロギア反応もありませんし。」

「我々などロストロギアを使うまでも無いと言っているのか？犯罪者の癖に！ロボットなんぞ魔法の前にはガラクタ同然だ！！」

ドン！と机に拳を叩きつけるディートハルト提督。彼にして見れば管理局創設以来の大艦隊が犯罪者如きに舐められているという事が許せなかった。

「落ち着いてください艦長。艦長がそれでは部下に示しがつきませんよ？」

「…ああ、そうだな。すまなかった。」

もし他の者が注意すればディートハルト提督は怒鳴り散らすであろう。しかしカルロには長年共に仕事をしてきた仲として、友として怒鳴り散らす事は出来なかった。

「艦長、これより宇宙船に通信を試みます。」

「うむ。」

ディートハルト提督は女性オペレーターの声に答えるとカルロに顔を向け。

「カルロ。俺はこういう事は苦手だ。お前がやれ。」

そう言い放った。何とも無責任な発言である。しかしいつもの事とクルー達は別に気にしていない。

「またですか。」

「ああ、まただ。」

「……はぁ、分かりましたよ艦長。」

もう諦めたよっという顔をしてそう言うカルロ。

「艦長！通信に応答がありました！映像来ます！！」

突如、女性オペレーターがそう叫ぶと、空中にディスプレイが表示された。そこには一人の男がいた。

「ごきげんよう時空管理局の諸君。こんなに楽しそうなパーティを開いてくれてとても感謝している。」

俺は笑顔で皮肉たっぷりの言葉を時空管理局に放った。

画面に映っている男は少し眉を顰めたがすぐに機械的に返してきた。

「私は時空管理局臨時第２３次元方面部隊旗艦『セントルイス』の

副官、カルロ一等空佐です。」

副官だと？艦長では無いのか？俺は舐められているのか？…まあいい、どうせ死ぬのだ。

「俺はメタルクウラ帝国の皇帝、メタルクウラ1世だ。」

俺がそう言うと男が息を呑んだ。それはそうか、相手は皇帝だからな。因みにメタルクウラ1世というのはさっき作った。

「こ、皇帝陛下でありましたか！失礼しました！」

画面にいる男が慌てた様子で謝る。

「別に構わん。それで、一体何を話そうってんだ？」

「えっと。我々時空管理局は現在ロストロギアの確保と次元漂流者の保護を目的に活動しています。」

ロストロギア？前に撃墜したポンコツの宇宙船が同じ事をいってたな。次元漂流者は何となく想像がつくがロストロギアは一体何なんだ？

「ロストロギアとは何だ？」

「ロストロギアとは異世界で高度に発達した魔法技術の遺産の事です。中には使い方しだいで次元世界を消滅させてしまう物もあるので、我々はそれを確保して安全な場所で管理しているのです。」

ふむ、なるほど。確かにメタルクウラは世界を消滅させる力を持っ

ているな。だがメタルクウラはメタルクウラ帝国の戦力の要。渡すわけが無いだろう。

「それで、ゲデスターの中にあるロストロギアを取ろうってのか？」

「はい。時空管理局は全てのロストロギアを確保する方針でいるので。それに管理局は次元漂流者を保護する方針でいるので我々は皇帝陛下を保護するためにも来たのです。」

「断る。我がメタルクウラ帝国は立派な主権国家だ。おまえら時空管理局のしている事は内部干渉だ。それにこっちにはロストロギアを渡す義理も無い。」

「はっ！主権国家だと？笑わせてくれる！」

突如、話していた男の隣に座っている男が話してきた。

「何だお前は？」

「犯罪者に話す名前など無い！」

こいつ、余程死にたいらしいな。

「か、艦長！」

隣にいる男が止めようとするが気にせず話し続ける男。

「我々のＸＶ級を一隻撃沈した時点で貴様はもう犯罪者なのだ！よって貴様の帝国とやらは我々にとって唯の武装勢力に過ぎん！」

「……これ以上話してられん。じゃあな糞時空管理局の諸君。」

そう言って俺は通信を切った。

くっくっく。少し情けをかけて話し合いをしたが相手がそう来るならもう遠慮はいらんな。いいだろう、木っ端微塵にしてやる！あの宇宙船の様にな！

とりあえず様子見で戦闘用ロボット５０万体を突撃させよう。あんだけ大口叩いたんだ。ガッカリさせないでくれよ？時空管理局さんよ。

第五話

「艦長！何してるんですか！？」

カルロが怒鳴る。それはそうだろう。せっかく交渉していたのにそれをぶち壊されたのだから。

しかし当のディートハルト提督は不機嫌そうに口を開く。

「ふん、あいつはどうせ我々の要求を受ける気は無かっただろう。ならさっさと片付けてしまおうじゃないか。俺の性格は知っているだろう？」

「しかし…」

「カルロ。ああいった輩には何を言っても聞かんよ。それにわざと時間を稼いで何かをしてくるかもしれん。被害を抑えるためにも、ここはさっさと片付ける方が良いんだ。」

「…はい、わかりました。」

ディートハルト提督はこういう時には、中々優秀な人物であった。

「敵のロボットが動き始めました！数は…ご、５０万です！！」

男性オペレーターが悲鳴の様な声で報告した。

「慌てるな！数は多いが局地的にはそんなに多くない筈だ！アルカンシェルの発射準備！！」

「了解！アルカンシェル、バレッジ展開！」

その声に呼応するかのように『セントルイス』の前方に3つの巨大な環状魔方陣が発生し、その中心に光り輝く魔力の塊が形成されていった。それと同時に、他の次元航行艦もアルカンシェルを展開する。

「ファイアリングロックシステムオープン」

ディートハルト提督の声に反応し、紫の丸い物体が入った透明の箱が目の前に現れた。

「犯罪者め、己の過ちを後悔するが良い。」

そう言いながら鍵穴に鍵を差し込む。すると箱に色が赤色に染まった。

「アルカンシェル、発射！！」

そう言い、鍵を右に回しアルカンシェルを作動させる。

すると前に巨大な半円体が現れ、それを突き破るように膨大な魔力エネルギーが飛び出した。

その魔力エネルギーは、ロボットの中央に着弾すると強烈な閃光を発したかと思えば周囲の空間を歪曲させ、百数十キロの範囲ごと反応消滅を起こしロボットをこの世から消し去った。

「おいおいマジかよ。」

目の前の光景が信じられなかった。

５０万体の戦闘用ロボットがあの艦隊から放たれたエネルギー波によって文字道り消滅させられたのだ。かなりの装甲を誇る戦闘用ロボットがああも簡単にやられるとは…

どうやら俺はこの世界を少々見くびっていた様だ。だが同じ過ちは二度とせん。

俺はメタルクウラ１０００体にゲデスターを包囲している全ての宇宙船の内部に瞬間移動をする様に命じる。流石に瞬間移動には対応できまい。しかも相手は戦闘用ロボットより何千倍も強いメタルクウラだ。それが一隻につき約４体。時空管理局はどうやっても勝てないだろう。

メタルクウラ１０００体が瞬間移動した数秒後、ゲデスターを包囲していた時空管理局の宇宙船が次々と爆発していった。

数十秒後には飛んでいる宇宙船は僅か数隻しかいなかった。あれはツフル人の科学者用に艦内にいる人を皆殺しにするよう命じたから

だ。

戦いは我がメタルクウラ帝国の大勝利に終わったが俺の心は晴れなかった。

まさか時空管理局があんな強力な武器を持っているとは。これは早くツフル人の科学者に時空管理局の宇宙船を解析してもらわなければな。

そう思いながら俺はメタルクウラを呼び戻す。うん？まだ抵抗している宇宙船があるぞ？無駄な抵抗が好きな奴らだ。まあいい、気晴らしに俺が直々に出向いてやるか。

そう思い俺は瞬間移動した。

「来たぞー！ここで何としても食い止めるんだ！！」

「だ、駄目だ！魔法がぜんぜん通用し、ぎゃあああああ！！？」

魔導師が一人、また一人と倒れていった。

「くそ、何て力だ…」

そう言うのは『エスティア』の艦長クライド・ハラオウン。偶然エスティアは拿捕の対象になっていたため他の次元航行艦の様に爆発させられずに済んだが結果はとしてはこちらの方が不幸だったかもしれない。

「まさか艦内に進入してこようとは…それにあのロボット艦長の魔法を受けても平然としてますし。」

レオ・ライアンが冷や汗を流しながら言う。クライドはＡＡＡランクで魔導師としてもかなり優秀な部類に入るが、そのクライドの魔法を食らってもダメージを受けている様子がないロボットに乗員全員が絶句している。

「艦内じゃあ強力な魔法は撃てないからな。くそ！これじゃあ全滅だ！」

クライドがそう言い終えると同時に、ピチュンと音を立てて一人の男が現れた。

「何！？お、おまえは！！？」

「やあ時空管理局の諸君、こんにちは。」

メタルクウラ1世である。

「君達が抵抗しているせいで中々落とせないんでね、だから俺が直々に相手をしてやる。まあ俺の気晴らしの為というのが大きいがな。」

「ふ、ふざけるな！！」

一人の魔導師が魔力弾を撃つがメタルクウラ1世はそれを右手で受け止める。

「そうかそんなに死にたいのか。」

そう言うと魔力弾を撃った魔導師に人差し指を向けるとデスビームを放った。

「ぐはぁ！？」

「がはぁ！？」

その魔導師の後ろにいた人の胸も突き抜きデスビームはエスティアの装甲を貫通し宇宙に出て行った。

「き、貴様！？」

「喚くな！どうせ貴様らは全員死ぬのだ！！」

「ふざけるな！！俺の使命は船員全員を無事に帰すことだ！誰一人死なせはしない！」

「ほぅ…中々勇敢な奴だ。貴様、名は？」

「クライド・ハラオウンだ。」

「ではクライド。俺と戦い勝利したら全員見逃してやろう。」

クライドにとってはかなり魅力的な条件だった。クライドはかなり優秀な魔導師で実戦経験も豊富にある。それに目の前の相手には魔力が全く感じられない。クライドは戦えば勝つ自信があった。

「いいだろう。受けてたつ。」

だからこそ、受けた。

「ふん、後悔するなよ！」

メタルクウラ1世はそう言うとクライドに高速移動で迫った。

「ずあああ！！」

クライドの腹に目掛けて放たれた拳は吸い込まれる様に入り、その衝撃でクライドの体は後ろに吹き飛ぶ。

「艦長！！？」

船員が悲鳴の様な声で叫ぶがメタルクウラ1世は気にせず瞬間移動で吹き飛んでいるクライドの後ろに回りこみ、踏み潰した。

「かはぁ…！？」

クライドは床にめり込みながら胃液を吐き出し、悶え苦しむ。

しかしメタルクウラ1世は気にせずクライドの髪の毛を掴み持ち上げる。

「どうした？この程度か？」

「ぐっ…！」

クライドは魔力弾を撃とうとしたがデバイスが無い事に気づく。デバイスが無ければ魔法が撃てない。

「ふん、どうやら杖が無ければ撃てないらしいな。」

そう言ってメタルクウラ1世はクライドの胸に右手を添える。

「じゃあな。」

そう言うと気功波を放ち、後ろにいる船員を巻き込みながらクライドはこの世から消え去った。

「さて、ゴミの掃除も終わった事だし。ゲデスターに帰るか。」

そう言うとメタルクウラ1世は瞬間移動でゲデスターに帰っていった。

第六話

あの後ゲデスターに帰った俺はメタルクウラに拿捕した宇宙船を持ってくるよう命じた。

「スーモ。あの宇宙船の解析にはどのくらいの時間が掛かる？」

「まだ見ていないので何とも言えませんが…少なくとも数ヶ月は掛かりそうですじゃ。」

そりゃそうか。因みにこいつはツフル人の科学者達のリーダーみたいな奴だ。蹴ったらうわへへｗｗと言って吹き飛んでいきそうだ。

さて、宇宙船を回収し終わったら敵の本拠地に進攻して行きますかね。時空管理局の宇宙船はさっきの戦いで全て撃墜したから安心してゲデスターを動かせる。

くっくっく、奴等の驚く顔が見ものだな。

進攻の手順はまず敵の総司令部を叩き命令系統を大混乱にさせる。そして敵を分断し各個撃破する。

ぶっちゃけこんな事しなくても余裕で勝てるんだけどな。まあ本当は時空管理局の情報を得るために総司令部を落とすんだけどな。消されちゃ困るし。

お、思案しているうちに無事に宇宙船を収納できたぞ。じゃあ行きますか。

そう思い俺はゲデスターを動かした。

時空管理局の混乱はもはや言葉では表せない程になっていた。

特に第２３管理世界にある惑星『ビダリア』の混乱は凄まじかった。

何せ時空管理局創設以来の大艦隊の反応が途絶えたのである。それも一隻残らず。通信手は必死に応答を試みているが無駄な努力であろう。

「馬鹿な！？あれ程の大艦隊が全滅だと！？ありえん！何かの間違いではないのか！？」

「本当だ！！一隻残らず撃墜、または拿捕された！！」

総司令部ではあまりの事に呆然としたり発狂したり泣き出したりする者が続出。

さらに追い討ちをかける様に最悪の情報が入ってきた。

武装勢力の巨大宇宙船が『ビダリア』目掛けて進攻を開始したので

ある。しかも到着時間は僅か5時間しかない。

これらの事が拍車をかけてもはや総司令部はその能力を損失。作戦を立てるどころの騒ぎではなかった。

ある者がある部隊に命令を出すとまた別の者が同じ部隊に全く別の命令を出すだの現場は大混乱。さらに酷いのは仕官が民間の次元航行艦で『ビダリア』を脱出したのである。

ようやく混乱が収まり始めた時には武装勢力の巨大宇宙船はもう目の前に迫っていた。『ビダリア』は貴重な時間を無駄に消費しただけで、作戦など無かった。

武装勢力の巨大宇宙船の大きさに民間人や魔導師も唖然。民間人は残り少ない次元航行艦に殺到、完全にパニック状態で死傷者も続出、さらに暴徒化した民衆が略奪を働いたりして秩序も崩壊。もはや戦闘などできる状況では無かった。

あれから五時間後、何の抵抗も受ける事無く無事に時空管理局の本拠地に到着したが…

何だこりゃ？町中いたる所から黒煙が上がっているぞ？まだメタルクウラを送ってないのに何故だ？

まあいい、別に問題は無い。計画道り敵の総司令部を占拠するか。

因みにこの惑星の攻略部隊はメタルクウラ３００万体と戦闘用ロボット４００万体。

総司令部にはメタルクウラ１０００体と戦闘用ロボット２万体を向かわせる。

しかし客観的に見るとこれはもうただの虐殺だな。あの宇宙船には強力な武装があったが言い換えればあれ以外は全く脅威にならん。宇宙船内部で戦った時はメタルクウラには全く傷がついてなかったし、時空管理局の陸上戦力は大した事なさそうだ。

さて、それじゃあ作戦開始と行きましょうかね。

おいおい、僅か1時間で陥落しちまったよ。幾らなんでも弱すぎじゃないのか？

それともドラゴンボールの戦闘力が高すぎるのが原因なのか？まあいいか、とりあえず占領したんだ。細かい事は気にしない。

因みに敵の総司令部を占拠した部隊は敵のコンピューターをハッキングして時空管理局の情報を入手した。おかげで時空管理局がどんな組織なのが分かったぞ。

それにいろんな技術情報も手に入ったし、戦利品さまさまだ。

さて、惑星を占領したからこの惑星を統治しなければな。と言っても俺はそんなめんどくさい事はしないけどな。全てロボットに任せる。

因みにこの星の名前はビダリアらしい。今後はビダリアと呼ぶ事にしよう。

ビダリアでは現在治安が最悪な状況らしいが直ぐに収まるだろう。戦闘用ロボットが治安維持に回っているからな。抵抗する者は捕獲用ネットで捕まえて牢屋にぶち込む。本当ならカノン砲で消し去ってやりたいがそれじゃあ反乱が起こるからな。

それと資源を採掘させて戦闘用ロボットの生産を開始させる。メタルクウラの生産には生命エネルギーが必要だからまだ生産はできん。まあそれも直ぐに解決できるだろう。我々の技術力は既に人工的に生命を作れるからな。これで生命力の強い生き物を量産して磨り潰して生命エネルギーを奪いメタルクウラを量産する。

さて、この世界。第２３管理世界だったか？にはまだ時空管理局の息が掛かった惑星が１４個あるからパパっと侵略しますか。

取りあえず余裕で勝てる事は分かったから１４個の惑星を同時に侵略させよう。統治用と建設用のロボットも生産せねばな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6533z/

メタルクウラ帝国建設記

2012年1月6日10時52分発行